



## 控えの選手に声をかける②

斉藤勝先生のお話の続きです。

どこの大学でも、たいてい校舎の清掃を業者に依頼していますが、斉藤先生の大学も業者のパートの人が掃除をしているそうです。そのパートさんたちの中に、寒い日でも冷えきった床にかがんでタイル全部がきれいになるまで黙々と一枚一枚を磨き、雨の日にはドロドロに踏み荒らされた階段や傾斜を、滑ってケガ人が出ないように、自分が汚れるのもお構いなしに雑巾で丹念に拭いている一人の婦人がいらっしゃるそうです。

学生たちが平気でゴミをポイ捨てしていく大学の校舎の清掃は、目立たないがとても大変なお仕事です。通り一遍にやろうと、ていねいにやろうと、誰かが見てくれているというわけでもなく、給料が変わるわけでもない。



斉藤先生はスポーツの道を志して自分の下に集まってくる若い選手には、その婦人の話をするそうです。

**他人に評価されるためなどという小さな心は捨てて**

**自分自身と自分のやろうとしている行為に誇りを持ち**

**常に自分のベストを尽くすことの貴さ**

を話しているそうです。

つづく